

# 古代における主格助詞「が」「の」

此 島 正 年

## 一、その特質

格助詞「が」「の」は、古代語において主格・連体格両様に用いられ、その用法が著しく似ていて、その間の差を見出すことが古来文法学者の好題目になっているが、近代になると、「が」は主格専用、「の」は連体格に傾いて来て、文法体系における職能を別にしようとする動きがめだつて来る。これは、体系の合理的に変化しようとする性質が、同じような職能で併存する語の整理にはたらいたよい例であつて、かくて日本語ははじめて純粹な主格助詞「が」を持つことが出来るようになったのである。

われわれが文献によつて溯りうる範囲では、両助詞共に連体・主両格に用いられているが、古代文献における両助詞の主格表現は純粹なものではなくて、周知のように、その係る述語が断止するばあい、すなわち独立文の主格を示すばあいはきわめて少ない。<sup>(注一)</sup>これは、「が」「の」のあらわす主格がその述語用言に対して従属であることを示している。<sup>(注二)</sup>そうして、主格とはいえこのように従属的であるという点で、両助詞が一方に持つ連体格用法と根本に連絡があるのであつて、体言に続き用言に続くという違いこそあれ、その受ける語を下へ従属的に緊密に結びつける機能に「が」「の」の本質があつたのである。<sup>(注三)</sup>

古代文獻において、主格「が」「の」が独立文中に用いられているといわれる場合も、その述語の形には種々の制限がある。例えば、山田博士は「奈良朝文法史」「平安朝文法史」において、述語に助動詞や終助詞の伴うばあいの多いことを指摘している。

心無く雲乃隠さふべしや(万一・一七)

かなしき児る我布ほさるかも(同十四・三三五一)

兵部卿の宮の人よりはこよなくものし給ふかな(源氏・蜩)

述語に助動詞・助詞のあるのは、国語の表現では普通のことであるから、特に「が」「の」のばあいにこれを取りあげるのは、やや当を失するが、もしこの説を生かせば、述語に助動詞・助詞のあるばあいは、用言は実質的意義だけをあらわすもので、「が」「の」はそれと結びつき、用言の下に在って陳述を受持つ助動詞・助詞にまでは関係しないということになろう。とすれば、独立文中の主格とはいえ、実はその述語の一部に続くだけで文全体には直接関係せず、従って附屬句中の主格と本質的な差はないということになる。

「が」「の」の続く述語が活用語で終るばあいには、その形が原則として連体形になることは、すでに古くから知られているが、<sup>(注四)</sup>

葦原のしけこき小屋に菅疊いやさや敷きてわ賀二人寝し(記・中)

夏草の露別衣著けなくにわが衣手乃干る時も無き(万十・一九九四)

散ると見てあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれる(古・一)

雀の子をいぬきがにがしつる(源氏・若紫)

これらの連体形は準体言化して陳述の機能を失い、実質的意義だけの、いわば「が」「の」が結びつきやすい形に

なっているわけである。ちなみに、この種の文構造では陳述が形態に現れず、時枝博士のいわゆる零記号と称するばあい(注五)に相当するのであるが、もしこの場合に陳述を形態にあらわせば、感動の終助詞を下につけることになり、それが前引の「かなしき児ろが布ほさるかも」のような文であろう(「かも」は上全体を準体句として受けているのである)。なおまた、山田博士がいわゆる喚体句として挙げる

ほととぎす鳴くなる声の音乃遙けさ(万十・一九五二)

夢にさへ人目をもると見るがわびしさ(古・十三)

等は、述語の形容詞が接尾辞「さ」によって体言化した場合である。述語用言に接尾辞「く」のつくばあい、

石戸割る手力もがまたよき女にしあればすべて乃知らなく(万三・四一九)

も右に準ずる。

以上、主格「が」「の」を受けて述語が連体形・「――さ」・「――く」等の準体言で結ばれる形式は、準体言であるがゆえに、そのまま文中に入って準体句(名詞句)ともなりうる。

その父と侍る大臣乃皇が朝廷を助け奉り……仕へ奉るを見し給へば(宣命・第七詔)

赤駒我門出をしつつ出でがてにせしを見立てし家の児らはも(万十四・三五三四)

ひまなき御前わたりに、人の御心をつくし給ふも、げにことわりと見えたり(源氏・桐壺)

いみじく物思ふなるが心苦しさに(同・浮舟)

み吉野の山の嵐之寒けくにはたや今夜もわがひとりねむ(万一・七四)

さて、主格「が」「の」が準体言の述語に続くことの多い点をとらえて、「が」「の」は主格とはいへながら多分に連体格の要素があるとする説が、古来広く行われている。(注六)この説の根底には、「が」「の」の本質を連体格と考え、

通時的には連体格が先で主格はそれから後に派生したとする考え方がるのであるが、この考え方の正否はともかく、一方に明らかに「連体格が・のプラス準体言」とすべき用例の少なくないことは注意しなければならない。

わが園の李の花か庭に散るはだれ能いまだ残りたるかも（万十九・四一四〇）

御けしきのいみじきを見奉れば（源氏・夕顔）

鈍色の細やかなるがうち萎えたるどもを著て（同・若紫）

これらは連体格「が」「の」が上下を結んで石垣謙二氏のいわゆる形状性名詞句を構成するばあい<sup>（注七）</sup>で、意味は語序を逆にして「いまだ残りたるはだれ」「うち萎えたる、鈍色の細やかなる（衣）」というのにほぼ等しい（「が」「の」の下体言は、意義的には上の語を修飾する）。これらの「が」「の」を主格とすることができないのは、一方に

冬の夜之明かしも得ぬをいも寝ずにわれはぞ恋ふる（万九・一七八七）

新に造れる寺の官寺と成すべきは官寺と成し賜ふ（宣命・第一三詔）

京の家の限りなくと磨くもえかうはあらぬはやとおぼゆ（源氏・総角）

渡殿の南の戸のよべ入りしがまだ明きながらあるに（同・若菜下）

のように、同じく形状性名詞句で、（例えば「冬の夜の明かしも得ぬ」は、「明かしも得ぬ冬の夜」の意）意義的にまったく主格とは解しえないものが少なくない点からも明らかである（例えば、「冬の夜の明かしも得ぬ」で「冬の夜」は「明かしも得ぬ」の客体であり、「南の戸のよべ入りし」では「南の戸」は「よべ入りし」の經由点を示している）。

これに対して、同じく「が」「の」が準体言に続く用例でも、前に挙げたのは石垣氏のいわゆる作用性名詞句を構

成するばあいでは、形状性名詞句のばあいと構造を異にし、その「が」「の」は明らかに連体格でなく主格である（例えば「その父と侍る大臣の皇が朝廷を助け奉り……仕へ奉るを見し給へば」は、「その父と侍る大臣が皇が朝廷を助け奉り……仕え奉ること」を御覧になるので）の意で、形状性名詞句のように「の」の上下を逆にして「皇が朝廷を助け奉り……仕え奉るところの、その父と侍る大臣」を御覧になるので）の意とすることはできない。これらを安易に連体格と関係づけることには賛成できない。これらの「が」「の」は、形状性名詞句の「が」「の」が準体言の体言性に結合するのに対して、準体言の用言性（すなわちその叙述）に結びついているのであって、従って「――さ」（「遙けさ」）「――く」（「寒けく」）等の準体言には、体言化の接尾辞「さ」「く」は除いて、「――」（「遙け」）「――」（「寒け」）だけに係るものと考えられる（そうして「音の遙けさ」「山の嵐の寒けく」の「さ」「く」は「音の遙け」「山の嵐の寒け」全体を受けて体言化することになる）。

ぬば玉の夜霧の立ちておぼほしく照れる月夜乃見れば悲しさ（万六・九八二）

あしひきの山沢人の人さはにまなといふ児我あやにかなしさ（同十四・三四六二）

等において、「見れば」「あやに」等の連用語はもちろん接尾辞「さ」を除いた「かなし」に係るのであり、とすれば、「月夜の」「児が」も同じく「かなし」だけに主格として係っていると見るべきであろう。

たお、上古の文献における形状性名詞句と作用性名詞句との比率を調べてみると、万葉では前者の一〇例に対して後者八三例、宣命では前者四例に対して後者一〇例という状態で（もっともこれらの中には形状性が作用性が紛らわしいものも多少ある）、この数字は、ほぼ上古における名詞句では作用性のものが多かったことを示している（注九）と見てよいように思われる。そうして、形状性名詞句がむしろ平安朝以後増しているらしく見えることは、湯沢博士や石垣氏の研究（注九）によってもうかがわれるのであって（もっともこれについては統計的調査がもっと必要である）、この

点から、「が」「の」の本質を連体格とし主格をその派生とする従来の通説には、必ずしも安易に従えないようである（もし通説のとおりとすれば、形状性名詞句が上古にもっと多くあるべきでなからうか）。少くとも文献以後の用例によるかぎり、主格「が」「の」が準体言の述語に続くことの多い点をとらえて、それを連体格の派生と見ることはゆきすぎで、両者はもうはっきり分化していると考えるべきであらう。

## 二、その述語の形

主格「が」「の」が係って行く述語用言には、連体形が圧倒的に多く、万葉で五七パーセント（一三五一例中七七二例）、宣命で八〇パーセント（一二〇例中九六例）を占める。そうして、その連体形には、今まで述べた準体言になるもののほかに、体言に続くもの、「ごと」「なべに」等の形式語に続くものなどがあるが、これらの中もっとも多いのは体言に続く用法で、連体形述語中、万葉七四パーセント（七七二例中五七二例）、宣命八二パーセント（九六例中七九例）、いわばその大部分を占めている。

霞立つ長き春日乃暮れにけるわづきも知らず（万一・五）

わが妻の児我夏草の思ひしなへて嘆くらむ角の里見む（二・一三八）

汝藤原朝臣乃仕へ奉る状は……（第二詔）

押勝我え仕へ奉るべき官にあらず（第二六詔）

連体形は、準体言化したものはもちろん、このように連体法に立つものでも陳述の機能は無く、用言の実質的意義

（注一〇）

だけに係ってその主体をあらわす「が」「の」が結びつきやすい形なのである。現代語の標準的用法で、主として連体格に用いられるようになった「の」が、ただ連体句の主格にだけは用いられるのも、このなごりである（現代語では準体句は無くなり、それに相当する形式には形式名詞「の」が用いられて、やはり一種の連体句になる）

―「花の咲くのを待つ」のように。

さて、準体句中の主格「が」「の」を連体格と関係づける通説については、前節で触れたが、連体句中の主格「が」「の」についても、これを下の体言（前引の例では「わづき」「角の里」「状」「官」等）にまで係るものとし、ここに連体格の要素を認める説が、<sup>(注一)</sup>普通に行われているが、これには、前述準体句のばあいと同様に、「が」「の」の本質を連体格にあるとするための飛躍が認められる。<sup>(注二)</sup>準体句に「連体格が・のプラス連体形」（「形状性名詞句」）があったように、この場合にも

### 三宝乃勝れてあやしき大御言驗（第一三詔）

秋萩之咲きて散りぬる花（万二・一二〇）

のような「連体格が・のプラス連体形プラス体言」の形式があり、これらは明らかに「が」「の」が「連体形プラス体言」（「勝れてあやしき大御言驗」「咲きて散りぬる花」）に連体助詞として係っている（「勝れてあやしき」もの、「咲きて散りぬる」ものは「大御言驗」「花」であって、「三宝」「秋萩」ではない）が、これと、「が」「の」が主格の場合とは、安易に一緒にすべきでない。すなわち、「が」「の」が主格のばあいは連体形だけと結合しているのであって、下の体言との結合は、「が」「の」によるのではなくて、連体形の機能である。例えば、「春日の暮れにけるわづき」では「春日の暮れにけるプラスわづき」という関係であって、「わづき」との結合は連体形「暮れにける」によって行われ、「の」は「春日」と「暮れにける」とを主述として緊密に結合するはたらきをしているだけである。ところが、この場合にたまたま「が」「の」を下体言にまでもかけても意義の通じるように見える例があるので（例えば、「汝藤原朝臣の仕へ奉る状」は本来「汝藤原朝臣の仕へ奉るプラス状」であるのに、一見「汝藤原朝臣のプラス仕へ奉る状」とも解しうる）、こんなことが、明らかに主述のばあいにまでもおし及ぼされて、「が・の連体

格主格一元論」を助長したのであらう。

主格「が」「の」を受ける述語用言として、もっとも多い連体形のほかにめだつのは、「く」「さ」等の体言化接尾辞のついたものと、接続法に立つものとのである。「く」「さ」等のつくものは、万葉で一〇パーセント（一三五一例中一三九例）、宣命で八パーセント（一二〇例中一〇例）、接続法に立つものは、万葉で一九パーセント（一三五一例中二五九例）、宣命で八パーセント（一二〇例中九例）を占める。「——く」「——さ」等に「が」「の」が続くばあいには、これを主格とせずに連体格とする見方がかなり行われているが、前述のとおり、「が」「の」は「——」に係るだけで、体言化の「さ」「く」には関係せず、やはり主格と見るべきである。

主格「が」「の」を受ける述語用言が接続法に立つばあいには、連用形単独で中止法もしくは修飾法的に下へ続くものと、用言が接続助詞を伴って下へ続くものがある。

大伴の遠つ神祖のおくつきはしるく標立て人能知るべく（万十八・四〇九六）

高光るわが日の皇子乃いましせば島の御門は荒れざらましを（二・一三七）

青山に日賀隠らば（記・上）

もしかくあらむ人をば己我教へ諭し訓へ直して（第五九詔）

これらの用法は、いかに連体格と関係づけようとしても不可能なもので、まったく主格とするよりしかたがない。しかも、この種の用法が上古の用例において決して小さいとはいえない比率を占めていることから、有史以前は知らず、少なくとも文献以後の国語では、すでに「が」「の」が連体格と主格とに完全に分化しているものと言わなければならない。ただ、その主格が古代では述語の実質的意義だけに係って著しく従属的である点に、連体格との類縁性の認められること、前述の通りである。

### 三、特に平安朝の「が」について

同じく古代とはいえ、奈良朝と平安朝との「が」を比較してただちに感じる差は、用言連体形を受けて主格をあらわす用法が、奈良朝に比して平安朝に激増していることである。石垣氏は、奈良朝にはまだ連体形を受ける主格「が」は成立していないとし、「母を離れて行くが悲しさ」のような用法は、主格「が」を成立させる端緒になったとはいえ、なお連体格とすべきことを主張しているが、この用法は、前述のとおり、すでに主格とすべきものと思う。しかし、ともあれ、連体形を受ける奈良朝の主格「が」にはこの種の形式だけしか見られないのに対して、平安朝に入ると、種々の形式の述語に続くようになつて、その用例数が著しく増加している（連体形を受ける「が」の連体格用例と主格用例とを比較すると、主格が連体格を圧倒しており、例えば、源氏物語では連体格約三〇例に対して主格約二三〇例、更級日記では四例に対して一六例という状態である）。

(1) 夢にさへ人目をもると見るがわびしさ（古今・十三）

(2) はひ隠れさせ給ひたらむやうならむが見苦しさといへば（源氏・浮舟）

(3) いみじく物思ふなるが心苦しさに（同）

(4) 軽々しうおしなべなるさまにもてなすなるがいとはしきこと（同・葵）

(5) わたり給ひなむがいとさうざうしきことを思す（同・少女）

(6) いさめ聞えぬがいふかひなきと思しのたまふこそ……（同・総角）

(7) この御事のしはすも過ぎにしが心もとなきに（同・紅葉賀）

等を見ると、(1)(2)は前代以来の形式で、すなわち「さ」で終止する「喚体句」であるが、(3)は同じ形式ながら準体句

として下へ連続し、(4)(5)は接尾辞「き」のかわりに形式名詞「こと」の用いられたものと見ることが出来る。(4)は嘆体句的に終止し、(5)は準体句的に連続する。(6)の「き」「こと」等無しに連体形がそれだけで体言化しているものである。

(8)やがてまかりぬべきなめりと思ふが悲しく侍るなり(竹取)

(9)つらを離れておくる雁をしひて尋ね給ふらむがふくつけきぞかし(源氏・常夏)

(10)いはまほしき事もえいはず、せまほしき事もえせずなどあるがわびしうもあるかな(更級)

等は一見独立文中の用例のように見えるが、「が」の係るのは「悲しく侍る」「ふくつけき」「わびしうもある」等の連体形までで、準体句全体を「なり」「ぞ」「かな」等が受けているものと見るのが、本来は正しいのであろう(もっとも、こんな用法が、歴史的には主格「が」の独立文中の使用をしだいに導き出す一つのいとぐちにはなっているであろう)。

(11)むなしき御からを見る見るなほおはするものと思ふがいとかひなければ(源氏・桐壺)

(12)いみじう氣高う清げにおはする女のうるはしくさうぞき給へるが、奉りし鏡をひきさげて「……」と問ひ給へば(更級)

は、接続句中に用いられた例である(接続句は、附属句とはいえ、独立性の高いもので、こんな用法も独立文中の主格「が」を導き出すに力があつたろう)。

以上は附属句中の用例で、古代の普通の用法であるが、次に独立文中の用例を挙げよう。

秋の田のいねてふことをかけしかば思ひいつるがうれしげもなし(後撰・九)

大きな松に藤の咲きかかりて月かげに靡きたる、風につきてさとにほふが、なつかしくそこはかとなきかをり

なり（源氏・蓬生）

炭を重ねおきたるいただきに火どもおきたるがいとむつかし（枕・岩波文庫本二六〇段）

丈六の仏のいまだ荒作りにおはするが、顔ばかり見やられたり（更級）

年三十許ナル女ノ、頭付ヨリ始テ目鼻口、此ハ弊シト見ユル所無ク端正ナルガ、髪極ク長シ、香馥シクテ艶ヌ衣共ヲ着タリ、（今昔、卷二十四、第八）

この用法は後になるほど増加したらしく、今昔物語では卷二十四・二十五だけで八例（連体形を受ける主格「が」二十九例の中）見られる。しかも、独立文中の主格「が」が、ほとんど用言連体形を受けるばあいだけ見られるのは、注意してよい。

このように平安朝に入って急速にその勢力を伸ばした連体形承接の主格「が」が、主格「が」全用例中に占める比率を見ると、源氏物語では約三〇〇の中二〇〇、紫式部日記では一四の中六、更級日記では二二の中一六、今昔物語（卷二十四、二十五）では一二二の中二九の多数を占めている。中世以後、文法的に完全な主格「が」が（注一五）発展したことは周知のとおりであるが、平安朝における連体形承接の主格「が」は、この中世以後の主格の発展のいとぐちをなしているように思われる。

（註一）このことを万葉集等の古代文献について精細に調査した論文に、佐伯梅友博士の「万葉集の助詞二種」（同氏著「万葉語研究」所収）がある。

（註二）現代語の「雨が降る。」のように、独立文で述語が断止するばあいの主語「雨が」は、述語「降る」に対して著しく対立的であるが、「雨が降れば」「雨の降る日」のように句中に入ると、述語との対立性が低くなり、述語と緊密に結合し一体となって下の語（「ば」「日」等）に続く。特に連体句ではこの傾向が強くなるので、現代語でもこのばあいは、主格の純粹

性を得た「が」よりも、従属的な「の」の方が多く用いられるのである。

(註三) 今泉忠義博士「国語発達史大要」四四頁

(註四) 例えば、宣長は「詞玉緒」で「の」を連体形止めの係に入れて、「そのや何」と称している。

(註五) もっとも、時枝博士のばあいは、連体形止め以外の用言にもすべて陳述を認めず、陳述は助動詞の作用であるとし、用言が述語として陳述しているように見えるのは、実は用言自体のはたらしきではないとして、すべてのばあいを零記号で解釈する。(「日本文法口語篇」)

(註六) 例えば、三矢重松博士「高等日本文法」増訂版、四六一頁、松尾捨治郎博士「国語法論攷」二一六頁。

(註七) 石垣謙二氏「作用性用言反撥の法則」(同氏著「助詞の歴史的研究」所収)

(註八) 時枝誠記博士「日本文法文語篇」四三頁参照

(註九) 湯沢幸吉郎博士「『の』『が』を伴う句の一形式」(同氏著「国語学論攷」所収)、石垣氏前掲論文。なお、石垣氏は別に、平安朝においても漢文系文章には形状性名詞句の少ないことを指摘しているが、これは漢文系文章が仮名文に比して上古のすがたを多く残しているものとも解せられる(石垣氏「語法より観たる今昔物語」国語と国文学、昭和十六年十月月号所載)

(註一〇) 山田孝雄博士は、用言の本質を陳述作用にあると説く学者であるが、しかし、「花の咲く木」というような形式では「の」のかわりに係助詞「は」を用いることの不可能なことから、連体形「咲く」には陳述作用がないのではないかと疑っている(「日本文法学概論」四九一頁)。係助詞は陳述に係する助詞であるから、連体句中にそれが用いられないとすれば、述語の連体形には当然陳述はないものと考えるべきであろう。

(註一一) 三矢博士「高等日本文法」増訂版・四六一頁、松尾博士「国語法論攷」二一六頁、浅見徹氏「『の』の歴史」(国語国文・昭和三十一年八月月号所載)等参照。

(註一二) 前掲浅見氏の論文に対して、三宅清氏の反論「『の』主格の発達について」(国語国文・昭和三十一年十月月号所載)がある。三宅氏の論文には、賛成できない点もあるが、少なくとも、「の」の主格と連体格とを安易に一元視すべきでないことを強調したのは正しい。

(註一三) 石垣氏も、この種の「が」を、意味はともかく、形態的には連体助詞と認むべきことを述べている(「主格『が』助詞より接続『が』助詞へ」(同氏著「助詞の歴史的研究」所収))。

(註一四) 「源氏物語大成」索引、「紫式部日記用語索引」、「更級日記総索引」によって調査した。

(註一五) 文法的に完全な主格とは、附属句中だけでなく独立文中にも自由に用いられ、またすべての体言・準体言を受けうるという意味。古代の「が」は、その受ける語にかたよりがあり、特に体言を受けるばあいに、意義の人に關する語を受けることの多い事實は、すでに諸家が指摘してより、筆者にも拙論がある(「古代における格助詞『が』」国学院雑誌・第五十七卷第七号)。